第六章

科学

----進化に背いて----

村山 敏勝



「人間は虫にすぎない」『パンチ』(1882年カレンダー)

第一節 科学嫌

言する。 フトの私記』(一九〇三年、以下『私記』と略記)の語り手は断てトの私記』(一九〇三年、以下『私記』と略記)の語り手は断

は見ている。 (「冬」第十八章)は見ている。 (「冬」第十八章)は見ている。 (「冬」第十八章)は見ている。 (「冬」第十八章)は見ている。 (「冬」第一日ので、それが人類の残忍な敵となるといいがく長い将来にわたって、それが人類の残忍な敵となるといいがく長い将来にわたって、それが人類の残忍な敵となるといいないでは、恐怖の、いやほとんど戦慄の形さえとることがある。 (「冬」第十八章)は見ている。 (「冬」第十八章)は見ている。 (「冬」第十八章)は見ている。 (「冬」第十八章)は見ている。

> るかのように思われがちだが、彼らはヴィクトリア朝末期とい 『タイム・マシン』(一八九五年)や 『透明人間』(一八九七年) 二人を結びつけたのはまず、下層中産階級出身で苦労して学識 産な晩年を過ごしたこともあって、二人は別の時代に属してい 論議したという記録は残っていないが、ギッシングはむろん を身につけたという出自の共通性で、 九六年に知り合い、家族ぐるみで親しく付き合うようになる。 G・ウェルズだった。ギッシングはこの九歳年下の作家と一八 る。晩年のもっとも親しい友人といえば、「SFの父」H 義思想家フレデリック・ハリソンだった。自然主義小説という ろうか。若き日の彼は実証主義哲学、 を読んでいた。ギッシングは早世し、ウェルズは長生きして多 方法そのものが、「科学的」な客観性を前提としたものでもあ 会主義に関心をもっていたし、実際彼を世に出したのは実証主 間と社会を分析する哲学に、またその政治思想版というべき社 しかし、ギッシングは科学にただ目を背けていただけなのだ 科学について彼らが深く 「科学的」な方法論で人

自身よりずっと年長に設定されているので、当時を自ら覚えているの第十八章は、その後「四十年前のあのおおらかな希望と熱意の時代が懐かしいと思う。あの当時、科学は救世主とみなされの時代が懐かしいと思う。あの当時、科学は救世主とみなされいた」と続く。四十年前のあのおおらかな希望と熱意がいた。と続く。四十年前のあのおおらかな希望と熱意がいた。

う同じ時代に生き、書いていたのだ。

取りこんだ科学といえば、 だった。 だった。 くれるのではという思いは、文学者のなかにもあった。 努力ではないか?」(第九章)と言わせている。 高まっていた時代である。そうした動きは文学にも反映されて、 されるのは一八六七年のことだ。もちろん社会主義への期待も 想を英語圏で一般に知らしめた。ロンドン実証主義協会が設立 英訳版と、 の生みの親、 ろ意識してその希望に背を向けた作家なのである 人と社会をいかに結ぶかという問いに、科学がヒントを与えて つに結ぶ統一性を確かめようとすることこそ、もっとも高次の いだろうか、もっとも小さなものともっとも偉大なものとを一 水車小屋』(一八六〇年)で語り手に「科学はわれわれに告げな ルイスの配偶者だったジョージ・エリオットは、『フロス河の の科学哲学』は、いずれも一八五三年に出版され、 っているが、イギリスでは彼はようやく紹介され始めたところ とくにギッシングが関心をしめし、 四十年前」は、科学に対する希望と熱意が溢れていた時代 ギッシングは、そうした風潮をよく心得た上で、 ハリエット・マーティノーによる『実証哲学』の縮約 ジョージ・ヘンリー・ルイスによる解説書『コント オーギュスト・コントは同じ一八五七年に亡くな 生物学である。 作品にしばしば否定的に 当時大きな話題にな 個と全体、 コントの思 たしか むし 個

> ことで出世しようとする主人公ゴドウィン・ピークの歩みに この時代、生物学のことばと人間社会を論ずることばを完全に 風呂敷の友』(一九〇一年)では、 は、『種の起源』 出ている。近代的合理主義者であるにもかかわらず聖職につく に生まれて』(一八九二年)では、 分離するほうが無理だったと言ってよい。なかでも もの作品に射している。ダーウィニズム論争が社会問題だった な構想を語ることで有力者にとりいろうとする いると言えるだろう。また、同傾向の設定がされた『我らが大 く言及した例を、私は知らない。 っていた熱力学などの物理学、 出版後の古生物学をめぐる論争が あるいは化学について彼が詳し 主人公が、 科学が中心テーマとして躍り しかし、 生物学の 生物社会学の雄大 凝縮され 影はいくつ 流滴 0 7 地

化論をめぐる議論が熱くなっていた時期である。また実証哲学

『種の起源』

この判断は正当なものだろう。

ダーウィ

のが、出い、

版は一

八五九年。六〇年代初頭といえば、

進ン

者で、 るだろう。『父と子』の主人公バザーロフは医師で、 チュアとすら言ってよく、ここに『私記』がいう「四十年前 門科学者 科学を利用し、それに失敗する彼らは、下層中産階級出身の専 役は肯定的に描かれているわけではない。 地に生まれて』のゴドウィンに、バザーロフの影を見るのは難 フ『父と子』(一八六二年)と比べてみれば、それははっきりす の熱狂はかけらもない。ギッシングの愛読書だったツルゲーネ しかし、この二つの作品のいずれにおいても、 旧弊な因襲を鼻で笑う「ニヒリスト」である。 -当時ようやく確立された職業である-自分の 出世の 科学を語る主 合理主 Ó 『流謫 いために カリ ź

しくない。

しかし、

ロシアの文豪が、

バザーロフをある部分肯

とでは同じでも、ギッシングのニヒリズムは、古い慣習以上に、 りそうにない。既存の伝統と合理主義との衝突を描いているこ ているのに対して、ゴドウィン・ピークの前にそんな未来はあ 定的に、来るべき社会を担う資質を備えた存在として位置づけ 科学」そのものに向いているのだ。

た言説が浮かび上がってくるはずだ。 考えてみよう。そこには十九世紀末の科学の、 るかを通じて、当時の科学、とくに生物学の展開をあらためて この章では以後、この科学への不信がどのようなかたちをと 幾重にも錯綜し

実証主義

かった。彼はゾラ流の自然主義小説はしばしば露悪的にすぎる 歩派の弁護士としてもっとも知られた人だったし、急進的総合 組合問題王立委員会のメンバーであり、 当時ロンドン実証主義協会会長だったフレデリック・ハリソン って、 J・S・ミルをはじめ、エリオットやルイス、 なことだ。ハリソンは一八六七年から六九年まで、国会の労働 スティックに描いた第一作をハリソンに送ったのは、ごく自然 (図①)に送られた。若い作家が、労働者の生活ぶりをリアリ ・スティーヴンといった当時の代表的作家、批評家とも親し ギッシングの最初の長篇『暁の労働者たち』(一八八〇年) は、 『フォートナイトリー・レヴュー』(一八六五年創刊) 組合活動を擁護する進 レスリ に関わ

敷地である―

を紹介する。いわば作家の最初のパトロンとなるのである。

ちょうどこの頃ハリソンは、

ロンドンのフリート・ストリー

し、やがてギッシングを自分の息子の家庭教師に雇い、

出版社

として好まなかったようだが、『暁の労働者たち』を高く評価

における最初のコント哲学の理解者であり、

一八五七年には

五〇年代、オックスフォードのウォダム・カレッジでのことだ。 うとしていた。ハリソンがコントの著作に親しんだのは、一八

した新たな宗教「人類教」の教えを講ずるための本拠地としよ

言によって王立科学協会が十八世紀初頭に購入した、由緒ある ト近くのニュートン・ホール――その名の通りニュートンの助

-を借り、コントの実証主義哲学と、彼が作り出

カレッジのフェロー、リチャード・コングリーヴは、イギリス



図(1)

る。 初 協会に参加したのはわずかなあいだで、コントの直弟子ピエー 実証主義に関心を抱いていた。もっともギッシングが実証主義 ギッシング自身、 この集会が行われる一八八一年五月が最後だったとされてい ラフィットをフランスから招いてニュートン・ホールで最 あまり協会の活動に熱心ではなかったわけだが、 の指導者に、 マーティ コント自身から任命された人だった。 ラ 1 の抄訳を通じてコントを読み、 後で述べ

るようにそれはふしぎなことではない。

は、 についての考察を自然科学と直接結びつけた。そして彼が四○ して、「社会学」ということばを発明した。コントの壮大な体 間社会も、物理学同様の実証的法則によって解明されると宣言 学者だったが、 な「実証」による新たな体系が得られるのである。 は宗教によって「神学的」に説明されていたが、それに 的に進歩してゆくと唱えて、多くの人を魅了した。 年代末頃から語り始めるのが、科学による人類の救済を目指す :なき新宗教 |的||な抽象思考がとってかわり、そしていまや厳密に科学的 オーギュスト・コントの『実証哲学講義』(一八三〇~ 化学を次々と自らの体系に取り込み、さらには生物も、 人類の知の体系は「神学的」「形而上的」「実証的」と段階 観察可能なあらゆるものを一つにまとめあげ、 「人類教 本来の専門を大きく踏み越えて、 」である。 物理学、 コントは数 かつて世界 人間世界 四二年) 「形而 天文 人

ル

思ってよい。

に寄与しうるという確信など、 ことがなかったが、愛他精神の強調、 カルトだった。人類教の教会組織自体はその後大きく拡大する に高めることだったのだ。これは一種の「カルト」だが、 と祭儀を自分の教義のうちに作りだし、 ることこそ、 ン主義者など、後続世代の社会改革者たちに流れこんでいると ソンのような実践的活動に長けた知識人を引き込む力をもった の体系に取り込もうとしたコントが行き着いたのは、 に証明可能なもののみを足場にして、 人類教の目標だった。 その精神的な遺産は、 あらゆる法則を解明 社会学が人類の知的向上 なおかつ人類を向上させ 実証主義を宗教の位 教会組 フェビア ハリ 置

すとも考えられた。演繹的な体系性への傾斜と、 世界の法則を可能な限り明らかにすることに大きな期待を寄せ いいかもしれない。 の観察を積み上げていく帰納的方法の重視との衝突と言 な体系は、 ントの教義に直接従ったわけではない。 た人々はすべて実証主義者と呼んでよく、 ぶんに宗教的な理想主義が含まれていることだ。 やスペンサーをはじめとして、この時期に科学の価値を信じ、 こうして明らかなのは、 個別の事実を重視する科学的経験主義と齟齬をきた 実際ミルは 実証主義という科学主義思想に、 『コントと実証哲学』(一八六 コントのあまりに壮大 彼らのほとんどはコ もちろん、 一つ一つ個別 っても 3 た

五年)

コントの

思想は過度に「統

一性

へと向か しかし、

科学的方法から逸脱していると批判している。

実証

なのだ。 なのだ。 ま証主義とは、たんに自然科学を称揚するのでは なく、自然科学的な法則性を人間世界にも見出し、そこから社 なく、自然科学的な法則性を人間世界にも見出し、そこから社 ないた」。実証主義とは、たんに自然科学を称揚するのでは ないた」。実証主義とは、たんに自然科学を称揚するのでは ないた」。実証主義とは、たんに自然科学をが揚するのでは ないた」。 ないた」。 ないた」。 ないた」。 をいた」。 をいた。 をいたた。 をいた。 をいた。 をいた。 をいた。 をいた。 をいたた。 をいた。 をいた。 をいた。 をいた。 をいたた。 をいた。 をいた。

ある。 ことができるからだ……。なんともアイロニカルな、 芸術家は、社会の絶望的な悲惨さを材料として作品をしたてる 望」(『随筆と小説』 彼は現代社会のほとんどあらゆるものに幻滅していたのであ 間 もいうべき宣言だが、これを、人間性を重んじる芸術家が非人 い希望をもって語っていたのが、科学実証主義思想だったので いる。彼はここで、現代社会にはあらゆるところに絶望しかな ったのではないだろうか。彼は一八八二年に「ペシミズムの希 .的な客観科学に幻滅した、などと解釈することはできない。 このような理想主義こそ、ギッシングが耐えられないものだ そして彼の少年時代には、そんな社会を耐え難いほどに熱 楽天的になりうるのは芸術家だけだと主張する。なぜか。 所収)を書いて、ハリソンと袂をわかって 露悪的と

したのである。

験医学序説』(一八六五年)の文学作品への応用を唱えた。ベル「実験小説論」(一八八○年)は、クロード・ベルナールの『実的」だが、実証哲学の理想主義を必ずしも共有しない。ゾラの自然主義文学は、事実観察を基盤とするという意味で「実証

だ。しかし、建設原理としての実証主義が、あるべき社会を築 としてある法則性をもったシステム――ベルナールのいうデテ 生理学実験室で厳密に測定し、予測することができる。 複雑なメカニズムだが、細胞や器官、神経の一つ一つの現象は、 科学的な法則のもとに決定されており、 在稼動している、ときに不安をかきたてる法則を記述しようと くための法則を志向したのに対して、ベルナールやゾラは、 することができる。こうした姿勢は、紛れもなく「実証主義的 て人間もまた生物である以上、その行動を決定する法則を追求 ルミニスム(決定論ないし決定された体系)をなしている。 いう一つの有機体は、それら個々の働きの集合体であり、全体 実験科学であるべきだと主張している。もちろん生物は非常に ナールは、コントと同様、無生物のみならず生物の機能もまた、 医学・生理学も厳密な 生物と 現

問題系をいっそう浮き彫りにすることになる。間題系をいっそう浮き彫りにすることになる。にだしそこには、実証主義哲学に見られる人類の前進への期待がない。コントが、自然科学と宗教という救済の二つのモードを一体化させて未来を語ろうとしたのに対しの二つのモードを一体化させて未来を語ろうとしたのに対しの二つのモードを一体化させて未来を語ろうとしたのに対しの二つのモードを一体化させて未来を語ろうとしたのに対しの一般がある。

第三節 キリスト教ダーウィニズム

というべき上層中流階級以上のお嬢さましか恋愛の対象にでき 社会で上昇するためにもっとも確かな道として、 ないのだ ドウィンは、ギッシングの多くの主役たちと同じく、 進主義の雑誌に評論を発表している。 ゴドウィンは学んだ知識を生かして、化学工場に勤めつつ、 ていたトマス・ヘンリー・ハックスリーもここで教えていた。 している機関である。啓蒙的生物学者として時代の先端に立っ 物学の課程も備えた総合的な科学学校として一八五一年に創設 急進的な近代科学の信奉者だ。下層中産階級出身の彼の出身校 苦慮しているシドウェルの父、 ったバックランド・ウォリコムの妹シドウェルへの恋心-はロンドンの王立鉱山学校。鉱業や土木だけでなく、 彼は牧師になる道を探り始め、 進化論を扱った小説のひとつである。主人公ゴドウィ ろうとするのである。 クの名は、 流 ゴドウィンにちなんでおり、小説中のゴドウィンも最初は 現在はロンドン大学インペリアル・カレッジとして存続 謪 の地 が芽生えたことで、彼の人生は急転回する。 に生まれて』はイギリス文学史上もっとも正 無神論者で急進的政治思想家であったウィリア マーティン・ウォリコムにとり 科学と信仰を両立させようと しかし、故郷での友人だ 本来無神論者 身分違い 数学や生 シ ・ 階級 面 急 ゴ ピ か

> もジャン=バティスト・ラマルクの『動物哲学』(一八○九年) 摘されてきた。進化論はダーウィンが発明したものではない を無視したあまりに一面的なものであることは、 に打算的な偽善者にすぎない。しかし、そもそもこの対立図式 と断言する。このような見かたからすれば、 バラの出版業者ロバート・チェンバーズが匿名で出版した『創 の用不用論は大きな影響力をもった。 いえる。科学と宗教との単純な二分法は、 (一八七四年) などによって確立された、時代の産物なのだとも が、ジョン・ウィリアム・ドレイパーの『宗教と科学の闘争史』 護しようとする者は一人もいないのが事実だ」(第五部第三章) ランドもまた「近頃、 った対立図式はいまでもしばしば語られる。この小説のバック ト教の愚昧を打ち破り、 態度は、べつに特異なものではない。 『種の起源』以前にも多くの進化論が唱えられており、 ているが、 この小説では啓蒙的科学とキリスト教信仰 の自然史の痕跡』(一八四四年) 般読者に広く知らしめた。 |国教会のキリスト教がまさにそれだ| 両者を融和させようとするウォリコム師のような 頭脳も教育もある青年で、 新たな科学の時代をもたらした、とい 全ての進化論者が神を否定した がラマルクの影響下、 ダーウィニズムはキリス イギリスでは、 進化論の孕む多様性 ゴドウィンはたん いの対立 くりかえし指 中世のキリス を誠心誠意擁 一が当然視さ エディン 進化論

ト教

キリスト教の

精神と十分親和性のあるものだった。これについては後に述べ

わけではないし、むしろラマルク的な進化論は、

を 一

造

ダーウィン以前、

教会の生物学に対する公式見解はいわゆる

複雑で機能的に組み立てられている以上、かならずその「デザ 作り手がいると考えるはずだ。生物も同じこと。 ど精巧に組み立てられて目的をはたす機械には、かならずその 0 るとは考えない。世界は聖書のいうとおり一挙に創造されたは ってこそ自然の調和は達成されている。 イン」を作った存在、 八〇二年) 「自然神学」であり、 存在を知らない人でも、道で時計を拾ったとしたら、これほ の名高い比喩は、生物を時計に喩えるものだ。時計なるもの がその思想の集大成として参照されていた。ペイリ ウィリアム・ペイリーの『自然神学』(一 つまり神がいるはずであり、神の手によ 自然神学は種が変化す 自然がかくも

 $\stackrel{\text{(2)}}{\overset{\circ}{2}}$

ずであり、

あらゆる種は創造の時から現在にいたるまで同じ姿

地

質学が発達し、数多くの絶滅した生物の化石が発見されるにつ をとっているはずである、と。しかし、このような思想は、

疑問を呈されるようになる。地質学者は時代ごとの生物層

0)

変化をなんとか説明しなければならなかった

クランドは、 彼の名はたんに科学の進歩を象徴しているわけではない。 ウィリアム・バックランドは、まさにこの問題に直面した人だ た。小説中のバックランドは不可知論者を名のる進歩派だが、 *者であったオックスフォード大学教授のウィリアム・バッ ドウィンの友人バックランドの名のもととなった地質学者 聖書の教えと最新の地質学をなんとか合致させよ 自身

く

0) 0) 地質学と鉱物学』(一八一三~一八年) の科学書のうちでも、バックランドの『自然神学の見地による た叢書である。こうして書かれたキリスト教擁護派による八つ き出す著作を出版するようにと遺言を残した結果として生まれ ッジウォーター伯爵が、王立科学協会に八千ポンドを委託し、 うとした人物だったからだ。彼の代表作を含むのは、 「創造に表れた神の力と知恵と善」を、 「ブリッジウォーター論文叢書」。一八二九年に世を去ったブリ は広い影響力をもった 合理的かつ科学的に描 名高

学の枠組と実証的観察を一致させようと心を砕いた時代だった 世界』(一八六二年)は、まさにこのような見地から古生物世界 を立てる。バックランドは頑迷で非科学的な宗教家などではな 彼に地質学を手ほどきする老ガナリーは、 ドウィンが学校で褒美として貰ったフィギエの『大洪水以前の を描いた図版本で、ゴドウィンは当初その挿絵に魅せられるが、 天変地異のうちもっとも新しいものなのである。 のであり、ノアの洪水こそ、 は徐々に変化するのではなく、激変のたびに生物層が一変する 水といった天変地異によって起こるとするものだった。 教区の動植物の観察を趣味とした多くの国教会の牧師たちで である。 彼の立場はいわゆる激変説、 実証性を踏まえた大科学者だったが、そうした人が自 そもそもイギリスの博物学を支えていたのは、 地球誕生以来何度か繰り返された 地層の断層は大規模の地震、 あからさまに本に腹 少年時代のゴ 生物種 洪

創世記」

は、

神が世界を七日間で創造したと語るが、

一例だった。

ゴドウ

地質学

あり、 身科学に関心をもつウォリコム師が、 八六二年、 ィンが内心嘲りながら、 づけたのは無理もない。 |げ翻訳まで試みるフランツ・ こうした護教的科学論の流れはその後もとだえない。 1 英訳一八八六年)も、 ウォリコム師の前では「名著」と持ち そのような試みの ロイシュの 『聖書と自然』(一

ドの発見をも メガロザウルス図

は二十

・四時間の七倍ではなく、

はるかに長い時間を比喩的に語

聖書の

語る七日間

かに長

0

知見では地球が人類登場までに過ごした年月ははる

ロイシェはこの事態を解決するために、

ウィンもはじめは聖職につくことを考えてい 息子をバックランドと名 た。 自

た。

著書を十分読み解いた上で、こうした議論を展開したのだ

学な妄想家などではなく、

ライエルやダーウィン、

ケル

0 無:

照らしているという記述は矛盾しないのである。

口 ヘッ

イシェは

彼方の星の放つ光が地上に届くには何光年もかかるという事実

天地創造の四日目に神が創造した星々の光が地上をすぐに

類比させた」ものにすぎない。

六日働いて一日休むという「人間の一週間と神の創造の期間を ったものだと考えた。七日間という期間はあくまで比喩であ

そう考えれば、

たとえばはるか

のは、 ŀ な ŋ た。ダーウィンにおいては、 き延びるのにすぎない。 の弟子であり、ダーウィンに傾倒していた彼がやがて否定した 論そのものを否定しているのではない。 ャクソン・マイヴァートの は ダーウィン批判としてもっとも影響力をもったジョージ 進化論もまた護教論の体系に組みこまれた。 「デザイン」は否定されるのだが、 その変化のなかでたまたま周囲の環境に適応した変化が生 種の変化は「それぞれの生物に内在する特殊の力や 自然選択が進化の「唯一 つまり、 『種の誕生』 (一八七一年) 基本的に種の変化はランダムであ <u></u> いかなる意味でも自然神学的 原理であるという考えだっ これに対してマイヴァー もともとハックスリー ヴィ クトリ は、 傾向 進化 ア朝

が、 ズム (ダーウィン風主義)」と呼んでいる。 ている。 もってより高次のものへと進化していくという主張が反映され スト・ヘッケルは、旧来のキリスト教神学ははっきり否定した 護教的であるとは限らない。たとえばドイツの進化論者エルン ダーウィン主義」、ジェームズ・R・ムーアは「ダーウィニシ 性と進化論とを融和させた。こうした進化論をボウラーは は完璧へと「向かい続ける」という思想は生き続け、 というペイリーの教えが擁護できなくなっても、こうして自然 自 役に立たない器官 種の定向性を見ている。 の支配をうける」という。言いかえれば、 のだとすら言えるだろう。 祖先に生えている羽毛――などは、説明できないではないか。 かって変化していく。そうでなければ、 一十世紀の前半にいたるまで、主要な「進化論」であって、 ウィンの徹底した偶然性の世界は十分理解されていなかった 1然は完璧であり、過去も未来もその完璧な統一を保ち続ける 彼の「進化の系統樹」(図③)には、生物がある法則性を いやむしろ、こうした視点のほうが十九世紀はむろん -たとえば、まだ飛行能力をもたない鳥の 生物はみな、 神の定めた完璧な姿へ向 進化の途上に生まれる 目的論的な進化論は 彼は種の変化にある 宗教的心 偽

こうして仕立て直されたデザイン論である 謪 の地に生まれて』のゴドウィンが接近しているのも、

う一節では、

の観点は、現在のいわゆるID、

インテリジェント・デザイン

が導入されている。神の方向づけによって進化が進むというこ

かつては完全に静的であったデザイン論に時間軸

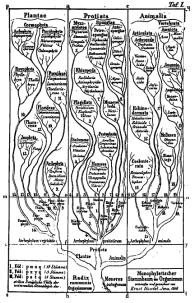
|遂行された、あるいはいま遂行されつつある有り様|

とい

の観念を受け入れるほかないのです」

第三部第四章

進化は、 宇宙に存するデザインの証拠を侵すものではあり



新しい法則を発見しただけです。説明しようとすれば、 者は生命を説明することはできていません。ただ生命に関する ません。それはただ、そのデザインが遂行された、あるいは かった時代から引き継いだ認識)を修正するだけです。 (十分に成熟しておらず、そのため科学が教えられることがな ま遂行されつつある有り様について、 私たちの不完全な認識 進化論 造物主

図(3)

ヘッケルの「系統樹」

きりみてとることができる。

的などではない真剣な思想的営みだった。 ばかりではない。ボウラーのいう偽ダーウィン主義は、 うな思想を抱いたのは、ゴドウィンのようなシニカルな偽善者 論者のとる立場でもある。あらためて強調しておけば、 この 反知性

j

本原理は、 宇宙が後戻りすることなく進化=複雑化していくという彼の根 サー自身は神の存在に関して不可知論的立場をとっていたが、 という議論は、ダーウィンよりもはるかに目的論的だ。 はしばしばダーウィニズムを人間社会に適用する「社会ダーウ てはめた哲学者といえば、 宗教的理想主義とも親和性が高かった。このような未来の進歩 ィニズム」の代表者とみなされるが、『総合哲学体系』(一八六 -まとまりのない均質性からまとまった多様性へと変化する_ ② の信頼感こそ、 · 引用に続くゴドウィンの台詞には、 進化」を生物のみならず宇宙全体に広げ、 偽ダーウィニズムの集大成というべきものであり、 が説いた、あらゆるものは普遍的動力によって ギッシングが体質的に反発したものだろう。 ハーバート・スペンサーである。 スペンサーの影をはっ 人間社会にもあ スペン 彼

ば、

全き魂のみが生き残りはしないでしょうか?. 者が残って自身は滅び去ります。これまでのところ進化の最終 態は肉体に宿る魂です。 低次の存在は、 高次の存在への橋渡しの役を務めると、 生存競争が究極の段階に達したら、 後

> いる。 とがありうるのではないだろうか。 ないかとも予想している。そのとき人間は種としての階梯を一 が少なく、その全員が安寧な生を保証される社会がくるのでは 進化に必要不可欠なものとして肯定したとしばしば考えられて 親でもあり、強いものが生き残り弱いものが滅びる生存競争を、 的プロセスのはてに、人間がいまより高次の段階に進化するこ 普遍的共存は、必然的に普遍的なリズムを生み……同時に究極 こうしてゴドウィンが言うとおり、 つ上がったといえるだろう。そのような進化のさらに先に、 可能性を語っている。彼は「適者生存」ということばの生みの の均衡を達成する」(Spencer 392)。こうした進化と解体の定常 たなものに乗り越えられる。進化と解体という「相対する力の し、それ以上の複雑化が望めなくなれば、 スペンサーの進化論では、 「全き魂のみが生き残る」段階がくるというゴドウィンの発 適者生存原則などに頼らずともよい社会、生まれる子ども しかし、彼は同時に人間の道徳性と能力が十分進化すれ ある存在が進化の結果平衡状態に達 実際スペンサーはそうした 古い生物種や社会組織は新 自然と解体に入る。

想は、 らためて強調しておこう。 学の多様な議論をすくいあげている。ここで揶揄されている思 こうして『流謫の地に生まれて』は、 いずれも当時の真剣な知的営為の産物であったことをあ 進化のはてに「全き魂」が現れると 十九世紀進化論と生

は、ことさら異様で滑稽なものとばかりは言えないのだ。

いう一見荒唐無稽なアイデアも、

オラフ・ステープルドンやア

も前向きの この特異な思想小説を完成させた。ギッシングは必ずしも当時 に代表される「科学の宗教」のどちらからも希望を奪うことで、 ものである。 サー・C・クラークなど、後のSF作家が真剣にとりあげた 「退化論」に芯から浸かっていたわけではないが、少なくと 「進化」を信ずる人ではなかったのである。 しかし、ギッシングは旧来の宗教とスペンサーら

第 远節 遺伝学と生物社会学

て、 といえるだろう。多くの場合、生物学はなかばメタファーとし るった二つの発想は、 とおり、 遺伝学の文脈と接続する。金森修がゾラについて指摘している 1 れることもしばしばだ。最後に、ギッシングが実際に参照した のであり、 伴わないわけにはいかない。犯罪人類学や優生学は、 リックが揺れ動くさまを検証して、 冊の本を中心に、 初期ギッシングの重要なテーマの一つは、労働者階級が自分 「生まれ」を脱し得ないというものだった。この発想は当然 すでに書き手が抱いている思想を補強するために使われる **一物学を人間に応用しようとすれば、** 進化論と遺伝学という、十九世紀後半に大きな力を振 同じ理論がまったく逆の結論を導き出すのに用 人間社会を語るのに用いられる生物学のレ 根本的に相容れないものをもつ。進化論 章の結びとしたい。 イデオロギー その典型 的判断を がら

暮らしが数世代継続することが必要なのだ。

ことが純粋に遺伝の問題ではないことがわかる。 に明るい明日はないようにみえるのだ。これはギッシングの初 可能性はある。ただしその効果はすぐには現れず、 育ちも完全に妻より下の男」(第二十六章)ということばからは、 に階級差別的な小説として、当時の遺伝学を反映している。主 期小説にもあてはまるだろう。ジェイコブ・コールグが指摘し 論的な暗い色合いのものになる。 遺伝学を基盤に据えるゾラの労働者階級表象は、 去の性質が受け継がれていくものだと前提する思想だからだ。 い、とまではギッシングは書かない。「育ち」によって改善の 人間は、もともと血筋が劣っているから改善の可能性は一切な 力のない下劣な性格を脱し得ないのだから。ただし「生まれも 人公リチャード・ミューティマーは、 ているとおり、『民衆』は、ギッシングのもっともあからさま る悪徳が綿々と子孫に伝わっていく以上、マッカール家の人々 が生物の変化を語る思想なら、 遺伝学は、 アルコール中毒をはじめとす 出自の低さゆえに、 生物が変化せず、 労働者階級の 決定論=運命 品位のある 過

最初から首が長く生まれる。 ウィンに先行したラマルクは、獲得形質は遺伝しうると考えた。 後に後天的に獲得した性質は子孫に遺伝しない。 でいる。ダーウィン進化論 ここには漠然とラマルク的な獲得形質遺伝の要素が入りこん いところの葉を食べようと首を伸ばしたキリンの子どもは (図④) において、 強い筋肉を身につけた職人の子ど ある生物が誕生 しかし、

高

した個体は、それを生物学的にも次世代に伝えることが可能な変化の要素を遺伝学に導入できる。意図して優れた特質を伸ばである。遺伝が絶対なら種の性質は変化せず、いつまでも同じである。遺伝が絶対なら種の性質は変化せず、いつまでも同じ社会の進歩を確信した論者の多くがラマルク主義者だったこともは、最初からたくましい。重要なのは、スペンサーをはじめ、



図④ 「ダーウィン進化説例証」『パンチ』(1877年12月15日号) 生存競争のために自分の楽器(手回しオルガン)だけにしか頼らない芸人のオルガンは、同時に猿も使う芸人のオルガンよりも常に大きい。

ソルボンヌの初代実験心理学講座教授でスペンサー主義者だる進化論に、ラマルク主義は必要な理論装置だった。のである。偽ダーウィニズム、たえざる前向きの進歩を想定す

ち 訳 L とはいえ― 1 他の心理的な遺伝を論じている。 れらは生物的遺伝と少なくとも同じくらい、 と軍人の家系を延々と列挙するのにも、 音楽家や文学者の家系を、 などという報告は非科学的にみえるし、 をして指が曲がった男の子どもがやはり指が曲がって生まれた 化し続ける」と述べる。 ては変わってくる。 は本質的に保守的な力」だが、「進化というものがある以上全 本的には決定論的な立場の書物である。 ギッシングの遺伝についての知識は、 (一八九七年) の登場人物もこの本を読んでおり (第一部第三章)、 の特徴がいかに遺伝するかというリボーの問題設定は ったテオデュール・リボーの の関心はどちらかといえば優れた形質の遺伝のほうにあった 一八七五年)は、まさにラマルク的な視点から、道徳性その の問題なのではないかと。 モーズリーの『身体と精神』(一八七○年)に拠っていたら (Collie, Alien Art 86)° -当時の犯罪人類学などにも通ずるものだ。 生物はたえず内的 現在の目で見ると、 いずれも遺伝を扱っている以上、 意志の強さの遺伝 『心理学的遺伝』(一八七三年、 しかし、 純粋に身体的ではない性格上 おもにリボーとヘンリ 才能 獲得形質が遺伝すると ただしリボーは 首を傾げたくなる。 外的な原因によって変 彼が挙げる、 教育、 の例として政治家 の遺伝の例として つまり 「遺伝 渦渦 ーリボ 基

いる。

純粋に生まれのみを因子とする遺伝学はあまりにも決定論的 育や住環境の改善によって向上させうるという思想と相関して 歩はそこからは生まれない。獲得形質遺伝の導入は、 ば、 自発性や自由意志を圧殺しかねないし、なにより社会の進 そもそも「生まれ」と「育ち」の差異は曖昧なのだ。 人類を教

当時の遺伝学は最適のモデルを与えてくれた。 遺伝学的進化論なるものがそもそも孕んでいる混乱を劇化し たギッシング自身の実感だろう。その感覚を正当化するのに、 ただリボーの進歩主義に対して、ギッシングのほうが、「階級 中途半端な考えは、『民衆』が示しているものと変わらない。 0) 数世代あれば後天的性質は「蓄積」し、後は遺伝によって人類 てのみ、 土地のようなものであり、数世代にわたるたえざる努力によっ そのような向上は可能なのだから。「野蛮人の精神は未開拓の 紳士が生まれることもあるだろう。 ているといってもよい。品位の向上には数世代が必要という思 の痕跡はすぐにはなくならない」という悲観性に傾斜している。 はたぶん、下層中産階級に生まれて後から上流の生活に触れ ・キをかけるために、遺伝学という後ろ向きの :向きの決定論ともいうべきスペンサー流の社会進化論にブレ 質は高まる。こうして「矯正には数世代かかる」というやや このように考えれば、労働者階級の家系からやがてりっぱな 矯正が可能である」(Ribot 327)。一世代では無理でも、 未開地域の異人種ですら、 ギッシングは 決定論を導入し

る。

力を失い、その「生物社会学」は歴史の彼方に追いやられてい

時、

学講座教授の地位にあったが、 がフランス社会学を学問として整備していくのに伴って、 学者、ジャン・イズレの 会関係を「化学的結合」にもとづくものと論じている。 ズレはここで、社会を有機体に、 ように利用するのは、いまではほぼ忘れられたフランスの社会 人公ダイス・ラシュマーがあたかも自分のアイデアであるか らが大風呂敷の友』の「生物社会学」に見ることができる。 科学が修辞的に使用されるもう一つの例は、 楽天的な進化の語りに楔を打ち込んでいるのだ 彼のために用意されたコレージュ・ド・フランスの政治哲 『近代都市』(一八九四年)である。 その後デュルケームと弟子たち 個々人をその細胞に喩え、 最後の長篇 彼は当

イ

0

トル とが浮かび上がっている。 ーによる本の要約を見れば想像がつく。 そんなイズレのどこにギッシングが惹かれたかは、 -社会を有機的な連関としてみる考えと、 ここには二つのヴェク エ リート主 ラシュ

業を意味します。さて、 中心原理は結合にあり、 完全に科学的で、 頭 の動物は多数の細胞の結合です。 生物社会学とは、 説得力があります。 生物学的事実に基づく社会理論です 有機的発展の進歩とは、身体を指導す そこから指導の力が進化するのです。 あらゆる結合は労働の分 ……どちらの学問でも、

家』(一八八四年)で彼は、完全にレッセ・フェールの立場をと をエリート主義の正当性の根拠とみなしたのだった。 は自然に反する」と唱え、有機体における器官ごとの機能分化 はどちらも、 家権力についてまったく異なる考えをもっていた。『人間対国 のような視点を当時もっとも強く打ち出したスペンサーは、 人間』(一八五○年)の仏訳者でもあったイズレは、「平等主義 『英雄および英雄崇拝論』(一八四一年)やエマソンの 社会を一個の生物として捉える見かたは古くからあるが、 一物社会学とスペンサーの 自由市場に対する国家規制の介入を否定している。 「社会は有機体である」と宣言し、 『社会学原理』(一八七六~九六年) 「機能のたえざ 『代表的 イズレ

そ 玉

呂敷の友』では触れられていないが、彼はコント同様、

キリス

0)

のである

集合体に、いかに秩序をもたらすかにあった。『我らが大風 ·ならない。イズレの問題意識は、「都市」という多数の

ト教に代わる新たな世俗宗教を構想している。カーライル

0 ば 工

リートは社会という生物の

「頭部」として大衆を率いなけれ

人間

れし者と群集とが分別されるのです」

はあります

動物有機体の細胞集合の場合と同じです。選ば

(第二章)

は無意味です。

政治的集合体を

〈頭部化〉するところに進化

〈平等〉を語る 指導器官、

まり政府がゆっくりと形成されるのです。……

でもそうなのです るべき器官

個々人の結合においては、

脳

が

:ゆっくりと形成されることです。

社会

つ

機体であるなら、ある程度の統合作用をもたざるをえず、 考えるスペンサーの批判者は多かった。イズレ同様、 と類比させている。しかし、 が独立していながら相互に関係しているという状況を、 サーもまた、 る細分化とともにそれらの構造も細分化する」という。 の部分がばらばらに動いていてはならない、と彼らは主張した ない。ハックスリーなど、有機体論と個人主義は両立しないと 要性を主張するのだ。イズレが特殊な見方をしていたとはいえ のごとく語るのに対して、イズレはあくまでエリート階層の必 全体の相互連関とは矛盾せず、両者が本来的に調和しているか 社会が労働の分業によって複雑化し、 スペンサーが個人の 独立性と社会 個々 社会が有 スペン 生命体 への部分 個

を選び、ダイスがやはり宗教的な思想家から影響をうけたの 体論が、結論としてまったく異なる政治メッセージを発すると あるのだ。伝統的な宗教にも、 が望めるのは、 皮肉というしかない。 1 かったギッシングだからこそ、 ギッシングは、相反する議論のどちらにも距離をおき、 用においてつねに現れる問題だが、『我らが大風呂敷の友』 いう事態である。おそらくこれは、 ここから見えてくるのは、 リックの空虚さを浮かび上がらせている。 聖職という伝統的な知的エリート職においてで 合理主義者が知力によってもっとも出世 ほぼ同じ言葉で語られる社会有 この矛盾を描ききることができ 科学の宗教にも、 自然科学の人間社会への援 ゴドウィンが聖職 幻想を抱けな その 0) 機

たと言ってよいだろう。

- (1) ハリソンの業績については、Martha S. Vogeler, Frederic 二〇〇〇年)八二~一〇七頁を参照。 び光永雅明「『人類教』とジェントルマン」『周縁からのまなざし Harrison: The Vocations of a Positivist (Oxford: Clarendon, 1984) ☼ 낷 -もうひとつのイギリス近代』 (川北稔・指昭博編、山川出版社、
- (21) John Stuart Mill, "Auguste Comte and Positivism" in Collected Works of John Stuart Mill, vol. 10 (Toronto: U of Toront P, 1969) 291-
- (∞) Peter Allan Dale, In Pursuit of a Scientific Culture: Science, Art, and Society in the Victorian Age (Madison: U of Wisconsin P, 1989) 7
- (4)代表例としてピーター・J・ボウラー『進化思想の歴史』(鈴 ィンの時代――科学と宗教』(名古屋大学出版会、一九九六年)。 木善次他訳、朝日新聞社、一九八七年)、同『ダーウィン革命の神 (松永俊男訳、朝日新聞社、一九九二年)、松永俊男『ダーウ
- (\circ) Fr. Henri Reusch, Nature and the Bible: Lectures in the Mosaic (5)バックランドについては松永、六九~八三頁を参照。なお、バ ックランド自身が後にノアの洪水説は取り下げている。
- (C) George Jackson Mivart, On the Genesis of Species (Bristol: Lyttleton, 2 vols. (Edinburgh: T. & T. Clark, 1886) 1: 176 History of Creation in Its Relation to Natural Science, trans. Lathleen Thommes, 2001) 44.
- (8)ボウラー、一九九二年、一〇三~二五頁。James R. Moore, *The*

- Post-Darwinian Controversies (Cambridge: Cambridge UP, 1979) 217-
- (Φ) Herbert Spencer, A System of Synthetic Philosophy vol.1: First Principles (Osnabrück: Otto Zeller, 1966) 29:
- (1) Herbert Spencer, A System of Synthetic Philosophy, vol. 3: The Principles of Biology II (Osnabrück: Otto Zeller, 1966) 522-33
- (11)金森修「仮想の遺伝学」『ゾラの可能性 (小倉孝誠・宮下史朗編、藤原書店、二○○五年) 一一一~一六 ---表象・科学・身体」
- (12)ジェイコブ・コールグ「その他の長篇・中篇小説」『ギッシン 頁。
- グの世界』(英宝社、二〇〇三年)二七六~七八頁。
- (3) Théodule Ribot, Heredity: A Psychological Study of Its Phenomena Laws, Causes, and Consequences (London: Henry S. King, 1875) 288
- (4)イズレについては William Logue, From Philosophy to Sociology.
- (日) Jean Izoulet, La Cité Moderne et la métaphysique de la socialisme Illinois UP, 1983) 111-17 を参照。 The Evolution of French Liberalism, 1870-1914 (Dekalb, IL: Northern
- (6) Herbert Spencer, A System of Synthetic Philosophy vol. 6: The (Paris: Felix Alcan, 1894) 646
- (2) M. W. Taylor, Men Versus the State: Herbert Spencer and Late Victorian Individualism (Oxford: Clarendon, 1992) 131-36

Principles of Sociology I (Osnabrück: Otto Zeller, 1966) 439